

イタリアでの感染拡大とその対策

昨年末に中国で発生した新型コロナウイルスは、今年1月の半ば頃からイタリアでも話題に上がるようになった。しかし、その当時は中国国内における感染拡大、死亡者の増大の状況をメディアで見ながら、大変なことが起きているのだと傍観していた。そうした状況はイラン、韓国へと飛び火して行った。中国から遠く離れたイランで、なぜそんな感染者が増加したのだろうかと思っていた。2月に入り、イタリアにも中国人旅行者夫妻の感染が確認された。彼らはスパンターニ隔離病院に入院させられた。それでもまだ、他人事のように思われていた。

しかし、やがてイタリア人の中にも感染者が増え始め、ようやく人々は自分たちの問題だと自覚するようになった。3月に入ると、イタリア全土に感染が広がり、緊急対策が必要となってきた。まず、託児所、保育園から学校、大学などの教育機関が全面的に閉鎖された。子供たちは、学校が休みということになり、初めは万歳と手を挙げて喜んでいたが、あまりにも休みが長期化して、心配事が続々と現れてきた。

カソリックの世界も事態が一変した。日曜日のミサが中止となり、教会は、個人の祈願者を入れるために、門が開いているだけだった。3月11日には、イタリア政府によるコロナウイルス感染拡大防止に対処するため、第1回目の国民に対する規制事項が発表された。これによって、日常生活必需品を扱っている店、つまり、食料品店、スーパーマーケット、薬局、病院、開業医以外はすべて閉鎖となった。また、一般企業の事務所、工場も閉鎖になった。

一般市民も上記の店に行く以外は、政府が作成した「自己行動責任証明書」に必要な事項を記入し、それを持って行動する必要がある。外出に際して、警官に呼び止められた時には、その証明書を提示しなければならなかった。警察が不適当な外出だと判定すれば、罰金、最悪の場合には禁錮の罰則が科せられる。そのため、多くの人は家にいるしかなかった。

ローマ法王による祈り

そんな状況の中、カソリックではローマ法王が中心となり、新型コロナウイルスの終息を願って、さまざまな祈りが行われた。法王は不安の度を増したローマ市内さらには世界全体の平安を祈願して、市内の教会に足を運び、自ら祈りを捧げた。3月15日、聖マリア・マジョーレ教会に赴いて聖母マリアに祈りを捧げ、そのあと聖マルチェッロ教会へと向かった。ヴェネツィア広場に到着後、不自由な足で200メートルほど歩いて、聖マルチェッロ教会に入ったのである。この教会には十字架像が祀ってある。時は遡って1522年。ローマにペストが蔓延し、人が次々と倒れ、死んでいった。その時、聖マルチェッロ教会の十字架像を持ってローマ市内を巡回したところ、ペストが終息したと伝えられている。法王はその十字架像の前で、新型コロナウイルスの終息を祈願したのである。

3月25日正午、法王は聖ピエトロ大聖堂で新型コロナウイルスの終息を祈った。誰も集まってはいけないということで、

法王はガランとした広い聖ピエトロ大聖堂でただ一人祈った。「アッシジの精神」に則り、私も天理教の人間として、同時刻に祈った。また天理教教会本部の祈りにも心を合わせて祈りを捧げた。

さらに3月27日午後6時、夕闇も迫り、大雨の降る中、無人の広い聖ペテロ広場で、法王は、新型コロナウイルスの終息を願うとともに、カソリック教徒の結束と信仰心を一層強固させるように訴えた。この時刻、大ローマ布教所はちょうど夕勤めの時間帯だったので、一緒に祈った。

現在までのローマの動き

新型コロナウイルスの感染拡大は、ちょうどカソリックの四旬節に当たる時だった。キリストが十字架にかかり、死んだ日の儀式は「Via Crucis」といって、毎年多くの信者、観光客を集めて、ローマのコロセウムでキリストにならって、選ばれた人たちが十字架を背負って歩く儀式が行われる。しかし、今年は人が集まることは禁止されていたので、復活祭の2日前の4月10日、ヴァチカンの聖ピエトロ広場で「Via Crucis」の儀式が行われた。広場は人々の参集は禁止。ほかに誰もいない中、7、8人が十字架を交代しながら支え持つて練り歩き、13カ所設けた場所で立ち止まり、そのつどキリストの十字架を背負う苦悩を表していた。

法王は、復活祭前日の説教の中で、「確かに今は、日ごとに恐怖が広がり、希望が失われているように見えるかもしれない。しかし、イエスは違う。彼は墓からでも命を呼び戻すことができる。」と述べ、信者たちを励ました。

4月25日、国民に対する規制の第2回目として首相の発表があった。経済的な困窮に陥った一般商店の開店、レストランやバル（飲食店）の開店、外出の自由（ただしマスク着用、人と人の間隔距離は1メートル確保）などがその中に含まれる。しかし、キリスト教の集会に関しては一言も触れられていない。日曜日のミサも禁止されたままだ。ただ、ミサの再開は、レストランやバルと同じ5月18日以降になると見られている。ただし、社会的距離はとること。

信教の自由、集会の自由は宗教にとって重要なことだ。世界には多くの教会、モスク、寺院等がある。これは、一般の人々、信者が集まり聖職者とともに、神に祈りを捧げるところだ。それゆえに世界には多くの信者を収容できるように、大きな教会、寺院が存在する。今回のように、国家の要請によって、宗教的集会を中止、延期せざるを得なかったことに関して、一面には宗教の弱さを垣間見た印象がある。その背景には、韓国の新興宗教の集会における集団感染問題が影を落としているようにも思われる。

新型コロナウイルスの蔓延によって、多くのカソリック信者も感染している。彼らを励まし助けるために、多くの神父が寄り添い、全身全霊を捧げた。しかし、自らもウイルスに感染し、命を落とす神父が続出したのだ。4月11日現在、命を落とした神父は130名を超えた。これは一種の殉教と見られている。